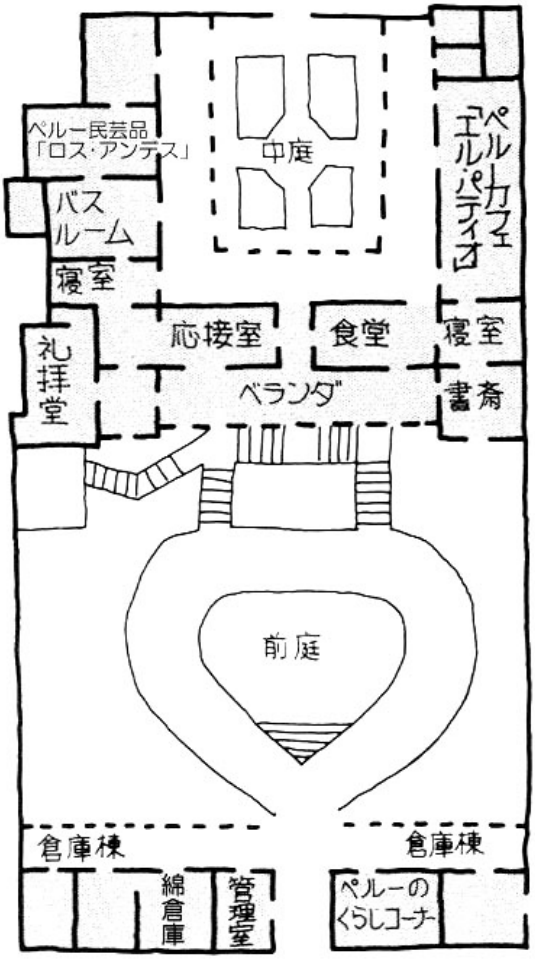
ペルー大農園 領主 の家

この家は、アシエンダと呼ばれた大農園の領主の邸宅を復元したものです。ペルーの首都リマから約７０キロほど離れた海岸地方のチャンカイ谷に建つ「カキ」という名前の大農園の館をモデルとしています。



【アシエンダ】

アシエンダとは、アメリカ大陸の旧スペイン植民地において、スペイン系領主が先住民のインディオやアフリカの黒人、アジア人らを小作人とし、その労働力を使って大規模な経営をおこなった農場のことで、16世紀末頃から発達したものです。農地改革で解体されるまで（ペルーでは 1969 年）、牧場や商品作物の栽培により、莫大な収益を上げていました。

【建築様式】

中庭（パティオ）を囲んで回廊、そして居室が配置されています。この様式は、もとは 8～15 世紀にかけてイベリア半島を支配していたイスラーム世界によってもたらされたものです。

ペルー先住民の衣装：伝統と外来のミックス

インカ帝国は、1532 年にスペイン人によって征服されましたが、その後、500 年近くたった現在でも、アンデス高地に住むケチュア人は、腰織と呼ばれる古くから伝わる織り機を使って、ポンチョ、肩掛け、帯などを作っています。伝統的な柄は、原色を巧みに組み合わせて表現し、見た目にとても色鮮やかです。ケチュア人の衣装は、ヨーロッパから入ってきたズボンやスカートに、これら固有の要素を組み合わせたスタイルが一般的。帽子は、山高帽や皿型帽が好まれます。

アンデスの動物：アルパカとリャマ

アンデス高地では、古くからラクダの仲間である「アルパカ」や「リャマ」が飼育されています。どちらもおとなしい性格です。毛がモコモコしてふっくら見えるのがアルパカ（写真左）で、そのやわらかい上質な毛は、衣類を作るのに適しています。一方、リャマ（写真右）はアルパカに比べてスマートな印象。毛はゴワゴワしており、衣類を作るのには適していません。しかし、アルパカに比べ、一回り大きく力も強いので、農作物などを運ぶ時には大活躍します。